

Journal
of **E**ducation
Inclusive

Printed 2016.0830
ISSN 2189-9185

Published by Asian Society of Human Services



August 2016
VOL. **1**

ORIGINAL ARTICLE

小学校の道徳副読本における「障害」の描写

Description of Disability in the Sub-textbook on Morals for Elementary School Students

田中 敦士¹⁾ (Atsushi TANAKA), 狩俣 怜美(Reimi KARIMATA)²⁾

1) 琉球大学教育学部

(University of the Ryukyus)

2) 沖縄県立泡瀬特別支援学校

(Okinawa Prefectural Awase Special Needs School)

<Key-words>

道徳副読本, 障害, 小学校, 障害理解教育

(Sub-Textbook on Morals, Disability, Elementary School, Special Needs Understanding Education)

atanaka@edu.u-ryukyu.ac.jp (田中 敦士)

Journal of Inclusive Education, 2016, 1:85-91. © 2016 Asian Society of Human Services

ABSTRACT

本研究では、小学校で使用されている道徳副読本をすべての出版社について収集し、「障害」に関する記述がどのように登場するか分析し、障害描写の傾向を明らかにすることを目的とした。平成 26 年度に使用されている小学校道徳副読本と、文部科学省が発行している「私たちの道徳」を分析対象とした。対象は、小学 1 年年生から 6 年生の計 6 冊を 9 社、計 54 冊、文部科学省発行の「私達の道徳」小学 1 年生から 6 年生の計 3 冊、合計 57 冊とした。分析対象の副読本の中で、「障害」に関する内容を扱っているイラスト・写真、文章などを全て抽出してカウントした。いずれの出版社においても「障害」に関する事項が登場するが、その回数には大きな差が見られた。低学年で「障害」に関する事項が登場したのは、合わせて 71 回 (6.6%) のみであった。「障害」に関する事項が登場する内容項目の登場回数の内訳で最も多かったのは、「思いやり・親切」であり、中学年で最も多かった。障害種別では、最も多く登場したのは「肢体不自由」であった。全ての学年で登場したのは、「肢体不自由」、「視覚障害」、「聴覚障害」、「発達障害」であったが、「発達障害」に関しては一つの出版社だけが取り扱っており、その他の出版社には見られなかった。

Received

2016 / 7 / 4

Revised

2016 / 8 / 10

Accepted

2016 / 8 / 20

Published

2016 / 8 / 30

I. 問題と目的

1994年6月のサラマンカ宣言以降、教育に関わる世界的な課題としてインクルーシブ教育が注目を集めている。2008年に「特殊教育」から新しくなった「特別支援教育」は、共生社会の形成に向けて、インクルーシブ教育システム構築のために必要不可欠なものである(文部科学省, 2010)とされ、特殊教育を一部継続しながら、インクルーシブ教育システム構築を進めている。

しかし、芝田(2010)は、社会に障害理解は浸透しつつあるが健常者の多数が抱えている一般的な障害に対するイメージは、「①障害者は健常者とは平等、対等の存在ではない。②障害者は健常者の身近ではなく、遠く離れた存在である。③障害者は健常者より社会的に下位の存在である。④障害者は憐憫、同情の対象である。といった先入観と偏見に満ちた内容である」と考察している。これらから、障害を適切に知らない、理解できないということは障害者との距離を生み、対等な人間関係を築くことは難しいだろう。したがって、共生社会の実現に向け、障害者を適切に理解し、対等な関係を育むためには「障害理解教育」は欠かすことができない。

今枝・楠・金森(2013)はO市の小学校299校に対し、障害理解教育の実施状況を調査した。その結果、小学校において最も実施しているのは、障害シミュレーション体験・在籍児童生徒の説明(54.2%)であった。その次に多いのが交流及び共同学習(37.3%)であった。また、障害理解教育をどの教科・領域で実施しているかについては、総合的な学習の時間(39.5%)が最も多く、道徳(26.9%)、特別活動(14.3%)、各教科(8.3%)と続いた。以上の結果から、学校では疑似障害体験や交流及び共同学習が多く行われていることがわかる。しかし、交流及び共同学習や疑似障害体験の活動だけに偏るのでは、障害に関して適切な認識や理解を深めることは難しい。

平成21年に告示された学習指導要領では、障害理解教育を最も多く実施している総合的な学習の時間が削減された。そのため今枝・楠・金森(2013)は、今後は各教科と関連して障害理解教育を実施していくことが重要であると指摘している。各教科で用いられる教科書や副読本には障害に関する内容が少なからず登場するため、障害理解を促すことができるであろう。ところが、教科書・副読本に登場する障害に関する内容に対し、水野・石上・徳田ら(2007)は、障害の大変さを誇張する資料が目立つ、「点字の読み方を覚えて実際に読んでみよう」といった、本来目指すべき障害者に関する学習につながっていないなどの問題点を指摘している。

今後の障害理解のための教育活動では、「交流及び共同学習」や障害疑似体験などの取り組みだけでなく、児童にとって身近である教科書や副読本をも用いて障害理解を促進することが望ましい。

徳田・水野(2005)は、道徳副読本のなかに障害に関する内容が多く取りあげられているが、それらの内容は障害理解の視点からみると「不適切である」と言わざるを得ないものが少なくないと指摘している。例えば、「頑張っている障害者」「苦勞している障害者」などのステレオタイプを子どもたちに与える内容や、障害者は援助されるべき社会的弱者として描かれている内容が非常に多くある。また、障害者は特別な能力を持っていると誤解させる記述も散見されるとした。また、明らかに障害者が援助を必要としている場面においてその障害者の自立のために見守ることを「思いやり」とする資料、逆に障害者に常に手を貸すことを「思

いやり」とする資料、誤った方法でも援助しようとするを「思いやり」とする資料が記載されていることを明らかにした。思いやりの気持ちを育むことだけをねらいとするのではなく、それぞれの場面でどのように援助することが共生社会を実現するために必要であるかについての適切な認識に導くことが大切であると述べている。

また、水野・徳田(2011)は、小・中学校で使用されている副読本の中で障害者がどのように扱われているかを明らかにし、副読本で障害が適正に扱われるための提案を行うことを目的に、平成 22 年度に使用されていた道徳副読本のうち入手可能だった小学 1 年生から 6 年生までの計 6 冊、7 社の合計 42 冊を分析し、障害を扱っている資料数を集計した。その結果、小学校低学年では障害に関する内容を扱う資料は少ないが、小学校 3 年以降になると増えていたことを明らかにした。ただし、副読本で扱われていた障害種は、肢体不自由と視覚障害を扱う資料が圧倒的に多く、障害種に偏りがあることを指摘している。

水野・徳田(2011)の研究は、副読本での障害描写を分析した研究として貴重であったが、すべての出版社の道徳副読本を分析したわけではなく、入手可能だった 42 冊のみでの分析であった。そこで本研究では、小学校で使用されている道徳副読本をすべての出版社について収集し、「障害」に関する記述がどのように登場するか分析し、障害描写の傾向を改めて明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 分析対象

平成 26 (2014) 年度に使用されている全出版社全学年の小学校道徳副読本と、文部科学省が発行している「私たちの道徳」を分析対象とした。対象は、小学 1 年年生から 6 年生の計 6 冊を 9 社 (教育出版、東京書籍、日本標準、文溪堂、学研、光文書院、日本文教出版、学校図書、光村図書)、計 54 冊、文部科学省発行の「私達の道徳」小学 1 年生から 6 年生の 2 学年ごとの計 3 冊、合計 57 冊とした。

2. 手続き

分析対象の副読本の中で、「障害」に関する内容を扱っているイラスト・写真、文章などを全て抽出する。イラストや写真においては、同じものが何度か登場しても別のものと見なし、カウントした。資料・コラム以外の見返し部分や表紙は分析対象外とする。

III. 結果

1. 「障害」に関する事項の登場回数と記載率 (出版社別)

表 1 は、「障害」に関する事項の登場回数と記載率を出版社別で示したものである。各学年の合計は資料とコラムに分けて集計した。いずれの出版社においても「障害」に関する事項が登場するが、その回数には大きな差が見られる。低学年で「障害」に関する事項が登場したのは、合わせて 71 回 (6.6%) のみであった。この要因として、第 1・2 学年の両方で「障害」に関する事項が登場する出版社が 5 社のみだったことが考えられる。また、日常生活や基本的な生活習慣に関する資料が多いこと等が考えられる。一方、中学年と高学年に関しては、

1つの出版社を除いて1回以上登場している。したがって、中学年と高学年は「障害」に関する内容を扱いやすい学年であることがうかがえる。また、中学年から登場回数（記載率）が高くなっていることがわかる。これは、ほとんどの出版社が、中学年に、「バリアフリー・ユニバーサルデザイン」に関する内容を盛り込んでいるためである。この内容の資料は、町の様子が描かれているため、「障害」に関する事項が多くなっている。しかし、この「バリアフリー・ユニバーサルデザイン」に関する事項は、コラム内で取り扱われているものが多い。そのため、十分に時間をかけて学ぶことは難しいと考えられる。

表1 出版社別に見た「障害」に関する事項の学年別登場回数と記載率

出版社	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
A社			1(0.9%)	1(0.9%)		1(0.7%)	3(0.4%)
B社			4(2.7%)	25(16.6%)	18(11.1%)	9(5.0%)	56(6.4%)
C社	26(25.0%)	3(2.6%)	9(7.5%)	6(4.6%)	7(5.1%)	23(15.9%)	74(9.9%)
D社	1(0.9%)		30(23.4%)	26(20.3%)	11(7.6%)	15(10.4%)	83(11.0%)
E社	3(3.0%)	1(0.8%)	7(5.6%)	28(21.8%)	6(4.1%)	4(2.6%)	49(6.4%)
F社			17(12.5%)	5(3.6%)	4(2.7%)	3(2.0%)	29(3.8%)
G社		16(13.1%)	12(8.4%)	14(9.8%)	24(16.0%)	24(14.8%)	90(11.0%)
H社	5(4.5%)	7(5.6%)	12(9.1%)	17(11.5%)	15(9.6%)	11(7.0%)	67(8.1%)
I社	2(1.9%)	4(2.7%)	43(26.8%)	13(7.5%)	20(11.3%)	25(13.2%)	107(11.3%)
J社	3(1.8%)		10(5.6%)		15(7.2%)		27(5.1%)
資料	26.5(2.6%)	16.5(1.4%)	79(6.1%)	78(5.8%)	78.5(5.4%)	96.5(6.4%)	375(4.8%)
コラム	12(1.2%)	16(1.3%)	61(4.7%)	62(4.7%)	34(2.3%)	26(1.7%)	211(2.7%)

2. 「障害」に関する事項が登場する内容項目の内訳

表2で、「障害」に関する事項が登場する内容項目の登場回数の内訳が明らかになった。最も多かった内容項目は、「思いやり・親切」であった。低学年で2件、中学年で16件、高学年で7件となり、中学年で最も多い結果となった。この要因として、バリアフリーやユニバーサルデザインに関する資料が、「思いやり・親切」に該当されていることが挙げられる。また、視覚障害者への援助方法の内容の資料が取り上げられることが多かったことも要因として挙げられる。視覚障害者への援助方法の資料では、I社は低、中、高学年で1資料ずつ、各発達段階に合った内容で継続的に取り扱っており、系統性が見られた。また、C社では、第3学年で視覚障害者への援助方法が1資料、第6学年では、聴覚障害者と肢体不自由者への援助方法の資料が1資料あった。同障害種への系統的、継続的な学習ではないが、各発達段階に合った資料内容であった。さらに、F社では、第4学年で1資料があった。これは、手を貸すことだけが思いやりではないと児童に気付かせ、本当の思いやりとは何なのか考えさせるような内容であった。このように、発達段階ごとに系統性のある内容を取り扱っている副読本もあれば、特定の学年で取り扱っているだけで継続性が見られない副読本もあった。教師は、資料がどのような内容で、どの障害種が登場しており、障害者は何に対して困っているのか又は、困っていないのかを、的確におさえる必要がある。

表2 「障害」に関する事項が登場する内容項目の内訳

分類	回数 (%)
①思いやり・親切	25 (20.8%)
②生命尊重	23 (19.1%)
③勤勉・勇気・努力	14 (11.6%)
④勤労・役割・責任	13 (10.8%)
⑤規則尊重・公德心	9 (7.5%)
⑥信頼友情	8 (6.6%)
⑦家族愛	6 (5.0%)
⑧個性の伸長	4 (3.3%)
⑨真理愛・創意工夫	4 (3.3%)
⑩公正公平・正義	3 (2.5%)
⑪自然愛・動植物愛護	3 (2.5%)
⑫愛校心	2 (1.6%)
⑬愛国心・国際理解	2 (1.6%)
⑭基本的な生活習慣	2 (1.6%)
⑮礼儀	1 (0.8%)
⑯寛容・謙虚	1 (0.8%)
合計	120 (100.0%)

3. 「障害」に関する事項が登場する内容項目の内訳

表3から、最も多く登場した障害種は「肢体不自由」であることがわかる。全ての学年で登場したのは、「肢体不自由」、「視覚障害」、「聴覚障害」、「発達障害」であった。しかし、「発達障害」に関しては、一つの出版社だけが取り扱っており、その他の出版社には見られなかった。したがって、「肢体不自由」や「視覚障害」、「聴覚障害」は「障害」に関して学ぶ際に扱いやすい障害種であることがうかがえる。また、「その他」は、「言語障害」に関する内容が3回(3・6年)、「認知症」に関する内容が3回(5・6年)、「高度障害」に関する内容が1回(6年)、「脳性麻痺」に関する内容が1回の計8回であった。また、「肢体不自由」に関する内容において、「車いす使用者(介助犬・義足を含む)」や「肢体不自由者」などが記載されていた。「肢体不自由者」の描写において、「手足が不自由な人」、「体が不自由な人」等のように記載されていた。しかし、「手足がない」等の記述も見られ、この説明では肢体不自由を適切に理解できるとは考えにくく、表現の仕方も多少気になるものがある。これは、視覚障害、聴覚障害に関しても同じことが言える。

表3 障害種別の登場回数

	肢体不自由	視覚障害	聴覚障害	病弱	知的障害	発達障害	障害全般	その他	合計
合計	185	171	118	21	6	6	71	8	586

IV. 考察

道徳副読本を分析した結果、道徳副読本の特徴として、「①第3学年及び第4学年での障害に関する事項の登場回数の急激な増加、②発達段階を踏まえた系統性のある資料の少なさ、③偏った、誤った障害観の形成に繋がる記述」の3点が明確になった。これら3点について考察する。

道徳副読本を分析した結果、①に関して、低学年、高学年よりも、中学年は資料とコラムの差が小さいことが明らかになった。つまり、中学年は、他の学年よりもコラムでの「障害」に関する事項が多いことがわかる。それは、このコラムでバリアフリーやユニバーサルデザインを取り扱っており、町の様子をイラストや写真で描いているためである。イラスト・写真での登場が多いのは、身近な町をイメージしやすく、視覚的に訴えることができる。また、中学年は社会科で「地域」に関して学ぶため、教科・領域間で系統的な学びを行うことができると考えられる。

次に、②に関して、発達段階ごとに系統性のある内容を取り扱っている副読本もあれば、特定の学年で取り扱っているだけで継続性が見られない副読本もあった。2008年3月に改訂された小学校学習指導要領解説道徳編で、「思いやり・親切」の内容項目の説明に、「他の人に接するときの基本的姿勢に関するものであり、相手に対する思いやりや親切な心を持ち実践のできる児童を育てようとするものである」と示されている。発達段階ごとに留意点が示されていることから、教師はこの指導の留意点をおさえ、資料がどのような内容で、どの障害種が登場しており、障害者は何に対して困っているのか的確におさえる必要がある。そのことを踏まえた上で授業を展開しなければ、障害理解教育を行うに当たり、児童に正しい障害の認識を持たせることができない上に、道徳的実践力を育成することは難しいであろう。

最後に、③に関して、目で見えてわかる障害種が多く、国語、生活科と同じような結果となった。また、近年では、学習や生活の面で特別な教育的支援を必要とする児童生徒が、約6.5パーセント程度の割合で通常の学級に在籍している可能性があるにもかかわらず、「発達障害」に関しての資料は少ない。「発達障害」に関しての資料が増えれば、資料を通して発達障害のある人のことを知ることができ、より身近に感じることができるのではないだろうか。また、障害種別の内容を細かく見ていくと、バリアフリーとユニバーサルデザインを誤って解釈してしまいそうな記述の仕方や、「視覚障害者＝目の見えない人」のように捉えられるような記述など、誤った障害観を形成させるような記述も少なくなかった。そのため、教師が補足的に説明をするなどの配慮が求められる。

小学校で用いられる教科書・副読本には、「障害」に関する事項が少なからず登場する。教科書・副読本に掲載されている「障害」に関する事項を十分に活用することで障害理解を促すことができるだろう。そのために、今後は教科書・副読本を基にし、各教科・領域を連携させて障害理解教育を推進する必要があると思われる。しかし、道徳副読本に描かれている「障害」に関する事項には、児童が適切に障害を認識することが難しいと考えられる記述が少なくなかった。むしろ、誤った障害観を形成してしまう危険性があると言っても過言ではないだろう。扱われる障害・障害者に偏り、誤りがないように、教科書・副読本の内容、構成を考えていくことが望まれる。

文献

- 1) 今枝史雄・楠敬太・金森裕治(2013) 通常の小・中学校における障害理解教育の実態に関する研究(第I報);実施状況及び教員の意識に関する調査を通して.大阪教育大学紀要, 61, 63-76.
- 2) 水野智美・石上智美・徳田克己・富樫美奈子・西館有沙・小野聡子ら(2007) 障害理解の視点からみた小・中学校の教科書と道徳副読本の問題点.第49回日本教育心理学会総会発表論文集, 49, 32-33.
- 3) 水野智美・徳田克己(2011) 道徳副読本における障害の扱われ方の適正化.教科書フォーラム, 8, 44-51.
- 4) 文部科学省(2010) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告).
- 5) 芝田裕一(2010) 障害理解教育及び社会啓発のための障害に関する考察.兵庫教育大学研究紀要, 37, 25-34.
- 6) 徳田克己・水野智美(2005) 障害理解一心のバリアフリーの理論と実践一.誠信書房.

- Editorial Board -

Editor-in-Chief	Atsushi TANAKA	University of the Ryukyus (Japan)
Executive Editor	Changwan HAN	University of the Ryukyus (Japan)

Aiko KOHARA
University of the Ryukyus (Japan)

Aoko CHINA
National Institute of Vocational Rehabilitation
(Japan)

Eonji KIM
Hanshin PlusCare Counselling Center (Korea)

Haejin KWON
Ritsumeikan University (Japan)

Hideyuki OKUZUMI
Tokyo Gakugei University (Japan)

Iwao KOBAYASHI
Tokyo Gakugei University (Japan)

Kazuhito NOGUCHI
Tohoku University (Japan)

Keita SUZUKI
Kochi University (Japan)

Kenji WATANABE
Kio University (Japan)

Kohei MORI
Kanda-Higashi Clinic, MPS Center (Japan)

Liting CHEN
Sophia School of Social Welfare (Japan)

Mika KATAOKA
Kagoshima University (Japan)

Mikio HIRANO
Tohoku Bunka Gakuen University (Japan)

Nagako KASHIKI
Ehime University (Japan)

Shogo HIRATA
Ibaraki Christian University (Japan)

Takahito MASUDA
Hirosaki University (Japan)

Takashi NAKAMURA
University of Teacher Education Fukuoka (Japan)

Takeshi YASHIMA
Joetsu University of Education (Japan)

Tomio HOSOBUCHI
Saitama University (Japan)

Toru HOSOKAWA
Tohoku University (Japan)

Toshihiko KIKUCHI
Mie University (Japan)

Yoshifumi IKEDA
Joetsu University of Education (Japan)

Editorial Staff

- Editorial Assistants	Mamiko OTA	University of the Ryukyus (Japan)
	Sakurako YONEMIZU	Asian Society of Human Services

Journal of Inclusive Education

VOL.1 August 2016

© 2016 Asian Society of Human Services

Editor-in-Chief Atsushi TANAKA

Presidents Masahiro KOHZUKI • Sunwoo LEE

Publisher Asian Society of Human Services

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production Asian Society of Human Services Press

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Journal of Inclusive Education
VOL.1 August 2016
CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

- The Measurement of Educational Assessment and Psychology, Physiology and Pathology for Children with Physical Disability, Health ImpairmentHaejin KWON, et al. 1
- Effects of Weekday Café Program in Special Needs School; Using by Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT)..... Yoshimi CHINEN, et al. 11
- Redefinition and Construct of Diversity Education..... Changwan HAN, et al. 19
- Remembering the Past Autobiographical Memories and Imaging the Future in an Adult with Amnesic Syndrome; The Role of the Involuntary MemoryMikio HIRANO, et al. 28
- Study for Construction of the Individual Education Support Model: Based on IN-Child Record Mamiko OTA, et al. 35
- The Influence of the Degree of Others/Self-understanding of the Social Interaction in Children with ASD Toru SUZUKI, et al. 48
- Study on the Expectation of the Student Volunteers to Assist in the Leisure and Learning for Hospitalized Children Sachiyo YAMASHITA, et al. 54
- The Verification of the Reliability of the SNEAT10; The Study of Screening Scale for Inclusive Needs ChildAiko KOHARA, et al. 67
- Social Psychological Study for Motivations of Supports for Developmental Disorders by Members in WorkplacesHiroataka KUWAKI, et al. 74
- Description of Disability in the Sub-textbook on Morals for Elementary School Students Atsushi TANAKA, et al. 85
- The Discrepancy in Members' Participation Purpose in the Self-help Group of Person with Disabilities and His/Her Family that Continues for Many Years: A Case of the Group for Down's Syndrome Takahito MASUDA, et al. 92
- Current Situations and Issues of the Education for Disability Understanding in Higher Education Haejin KWON, et al. 104
- Performance Analysis of Diversity Management using the Balanced Scorecard: Case Study of Japanese Companies Employing Disabled and the ElderlyMoonjung KIM 114

REVIEW ARTICLES

- Special Needs Education in School Education Act and Services and Supports for Persons with Disabilities Act Ryotaro SAITO 124
- Executive Function and Brain Pathology in People with Intellectual and Developmental Disabilities Yoshifumi IKEDA 132
- Research Trends on Educational Support and Psychological Characteristics of the Children with Physical Disabilities Kohei MORI 140
- Special Needs Education in The Elementary School Government Guidelines for Teaching and Nursery Childcare Indicator..... Ryotaro SAITO 146
- Basic Study about Development of the Education for Disability Understanding Index; Based on the Inclusive Education.....Haena KIM, et al. 155
- Current Situation and Issues Related to Organization of the Education Curriculum and Devising of Educational Treatment of Children with Health Impairments Kohei MORI 164

PRACTICE REPORT

- A Report of the Project of Establishment of Educational Security Center for the Long-term Hospitalized Children in Ehime Prefecture..... Kosuke NAKANO, et al. 170

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan